

昭和三十八年三月

宮崎県文化財調査報告書

第八輯

宮崎県教育委員会

ギヨボク自生北限地帯

県文化財専門委員

平

田

正

一

一、形状

ギヨボク樹幹の肌色は灰白色でイスビワや

クロガネモチの樹肌に類似し、樹形は直立形で分枝が少い喬木であつて、常緑樹の間に混在しても口につきやすい。地中根は長くひき、これから不定芽を生じて容易に成木となる。挿木によつても繁殖はたやすい。葉は三個の小葉からなる掌状葉で、茎に互生し、各小葉は全縁で葉裏は稍々粉白を呈する特徴がある。宮崎県に分布するものでは花の着生を見ないが、開花は夏で、葉腋に散状花序をつけ、初め黄色で後紫色となる。果実は漿果で紅熟する。日南地方に分布するものは、この果実の鳥類による運搬によって自生したものかも知れない。日南地方では冬はかなりの霜害をうけ、葉や枝先が枯れ、又幹も十メートル以上のものでは時に半ば以上も枯死するらしく、その都度萌芽を繰返すが、樹幹もせいぜい十メートル内外にとどま

るものと思われる。株は強風や寒さにも耐え、長く引いた根から不定芽を出して次々と独立樹を作り親株の周辺に簇生する。この地方で発見された多くのギヨボクは株元で切断され崩壊したものであつて自然形に伸長したものは少なかつた。ギヨボク生育地は一般に岩石の間に旺盛に根を張り強い生活力をもつて繁殖し、温暖な環境を選んだ凹地や、南面の海岸、又は杉林の中で发育している。

ギヨボクはフウチョウソウ科のギヨボク属に分類される。この科内の植物は熱帯から亜熱帯に分布する約五〇〇種がある。ギヨボクの属中には数種があるが、その内ギヨボクは南支那、印度、マレー、オーストラリヤおよびアフリカに分布し、日本では琉球、屋久島、種子島、薩摩半島（指宿、山川）および大隅半島（佐多）に分布することが知られていた。その後宮崎県南部海岸附近でも稀に分布す

ることが次第に確められ、現在出間市合六の奥、都井岬、市木、および日南市鵜戸があげられている。

黒潮沿いの大隅半島南部に統いて都井岬を廻り、鵜戸迄海辺沿いの山中に生育することが知られるに至つた。

ギヨボク（魚木）は日南地方では別名をアマギ（琉球名）と呼んでいる。漁師はギヨボクの材料を削つて魚型を作り、イカ釣りの偽解木として最良に利用している。代用品としてはクサギ材が用いられる。南方に出かけた漁師は、島の山中からギヨボクを採集して帰るという。

一、鵜戸のギヨボク

1、所在 地 宮崎県日南市大字宮浦字梅平三二七六番地（鵜戸神宮所有地）

2、地目及地積 山林 三アール

3、現 状 鵜戸神社社叢中最大の巨木である大杉の樹下で、細い山道を距てた山林中に自生する。昭和三八年一月二九日の調査結果は次表の通りであつて、七本の群生からなり、かなりの巨木である。この自生地は山棲

に囲まれた凹地とその斜面で、大きな岩石の点在する中

に生育している。面積は約二十メートル²に及び、山林はカシチクが茂り、コジイ、イヌビワ、クロガネモチ、コバノモチ等の樹木からなつてゐる。この群生は同一親株からの繁殖したものと思われる。十メートル以上の大きい幹は樹高の三分の一位先端が枯死している。この群生は明らかに自生と認められる。鵜戸のギヨボクの最初発見されたものは、この自生地に隣接する南側畑地の周辺で、崖下の草むらに四株あつたものである。これは度々株元から切斷され萌芽のみがみられたが、昭和三〇年頃この畑地がミカン園となり、ギヨボクは全部刈り取られた。このギヨボクは畑地の周辺にあり、各株の距離が等しかつたため栽植の疑があつた。本地のギヨボクは昭和三八年調査時、異常の寒波と霜害のため葉が半分以上枯死して捲き上つっていた。

ボク毎木調査
(昭和二八年一月二九日)

三、市木のギヨボク

株番号	根元周間	周目通り	樹高	備考
7	6	5	4	3
110	110	110	110	110
111	111	111	111	111
六	六	七	五	七
上部五〇cmで切断され四本 に分岐	土幹二本に分岐 土幹周目通り切斷され一本に 分岐	生幹四〇cmで切断され二本		

1、所在地 宮崎県串間市大字市木字磯平八八八〇番地（大下伊之助所有地）
2、地目及地権 山林一アール

3. 現状 自生地は市木の藤浦部落から一五〇〇米離れ、袖部落に向う南向の草原傾斜地の山足を通る川道

沿いである。ここは海岸迄四〇〇米で、二〇年生前後の

小規模の杉木立林があり、ギヨボクはこの林内に群生している。立地の環境は海岸で日当りよく開放されている。スギの木立は防風をなしている。ギヨボクの群生は

根によつて次々と繁茂したらしく、岩石の間に連つた根系が見られる。度々の伐採で巨木に発達したものはなく、萌芽状態のものが多いが、根廻りはかなり大きいものがある。ここでも葉は半ば霜害を受け枯死していた。

、由 来 糸戸のギヨボタについての最初の記録は、日野巖著「糸戸の官扇」（昭和一七年刊）に見られる。このギヨボタ発見の動機について著者に紹介したるもの、何分以前のことで発見の詳細は記憶にない、とのことであった。

株番号	根元周囲	目通り	樹高	胸	考
四〇〇	四八	三三〇	六三	五	
四九	四三	一一〇	二二	四	
五八	八	一五〇	二二	三	
一九	一九	一一一	二二	二	
三〇	三〇	一一一	二二	一	
主幹五〇cmで切断され一本に分岐					
主幹五〇cmで切断され一本に分岐					

4、由來 このギヨボク白生地は、市木小学校教諭湯地重義氏によつて昭和三七年九月二二日発見されたもので、それ迄道沿いにあり乍ら地方人も知らなかつたものである。

四、都井岬のギヨボク

1、所在地 宮崎県串間市大字都井岬

このギヨボク白生地は、市木小学校教諭湯地重義氏によつて昭和三七年九月二二日発見されたもので、それ迄道沿いにあり乍ら地方人も知らなかつたものである。

主幹三五cmで切断三本に分岐
主幹五〇cmで切断され一本に分岐

ギヨボクは二ヶ所にあつて、その一是坊主屋敷と呼ばれている猿寄場から東の凹地を約三〇〇m登つた左の谷間である。他の一つは猿寄場の西側を流れる小川を距てて、川から二〇m余り登つた斜面山地である。前者のギヨボクは稚樹の群生からなり、一連の根系で繁殖したものと思われる。度々の株元からの切断で根廻りは発達しているが、幹の生長したものは少く崩芽が多い。後者は森林伐採跡地に残されたもので、稚樹が育ちつつあるが、ギヨボクは岩石の間に根を張り、谷間を吹き上げる風に抗して一際高く二本の幹が孤立している。このギヨボクは鶴戸のギヨボクと同じく伐採された様子がなく、自然形で保存されたものと思われる。都井岬から鶴戸の日南海岸地帯がギヨボクの白生北限地と見られ、ここでは既に十分な發育をなしらず、過去においては寒気と強風で幹の半ばは枯死と仲長を繰返したものと推察される。

ギヨボク毎木調査

(昭和二八年一月三一日)

坊主屋敷東側のギヨボク

発見されたものである。同氏は元小学校長で當時都井岬の野生猿の餌づけを最初に手がけられ、山中を精査された際、偶然に発見された。その後続いて坊主屋敷西側のギヨボクも同氏等によつて発見された。

五、その他のギヨボク

株番号	根元周囲	周通り	樹高	幅	考
1	四八cm	四三cm	三・五m	主幹五〇cmで切斷二本に分歧	
2	六三	五・五m	一・五m		
3	三一	三・五m	一・五m		
4	七	一・五m	一・五m		
5	一・五m	一・五m	一・五m		
6	一・五m	一・五m	一・五m		
7	一・五m	一・五m	一・五m		
8	一・五m	一・五m	一・五m		
9	九	九	一・五m		
10	一〇五	八〇cm	一・五m		
11	一〇〇	八〇cm	一・五m		
12	一一〇	八〇cm	一・五m		
13	一一〇	八〇cm	一・五m		
14	一一〇	八〇cm	一・五m		
15	一一〇	八〇cm	一・五m		
16	一一〇	八〇cm	一・五m		
17	一一〇	八〇cm	一・五m		
18	一一〇	八〇cm	一・五m		
19	九	九	一・五m		
20	九	九	一・五m		
21	九	九	一・五m		
22	九	九	一・五m		
23	九	九	一・五m		
24	九	九	一・五m		
25	九	九	一・五m		
26	九	九	一・五m		
27	九	九	一・五m		
28	九	九	一・五m		
29	九	九	一・五m		
30	九	九	一・五m		
31	九	九	一・五m		
32	九	九	一・五m		
33	九	九	一・五m		
34	九	九	一・五m		
35	九	九	一・五m		
36	九	九	一・五m		
37	九	九	一・五m		
38	九	九	一・五m		
39	九	九	一・五m		
40	九	九	一・五m		
41	九	九	一・五m		
42	九	九	一・五m		
43	九	九	一・五m		
44	九	九	一・五m		
45	九	九	一・五m		
46	九	九	一・五m		
47	九	九	一・五m		
48	九	九	一・五m		
49	九	九	一・五m		
50	九	九	一・五m		
51	九	九	一・五m		
52	九	九	一・五m		
53	九	九	一・五m		
54	九	九	一・五m		
55	九	九	一・五m		
56	九	九	一・五m		
57	九	九	一・五m		
58	九	九	一・五m		
59	九	九	一・五m		
60	九	九	一・五m		
61	九	九	一・五m		
62	九	九	一・五m		
63	九	九	一・五m		
64	九	九	一・五m		
65	九	九	一・五m		
66	九	九	一・五m		
67	九	九	一・五m		
68	九	九	一・五m		
69	九	九	一・五m		
70	九	九	一・五m		
71	九	九	一・五m		
72	九	九	一・五m		
73	九	九	一・五m		
74	九	九	一・五m		
75	九	九	一・五m		
76	九	九	一・五m		
77	九	九	一・五m		
78	九	九	一・五m		
79	九	九	一・五m		
80	九	九	一・五m		
81	九	九	一・五m		
82	九	九	一・五m		
83	九	九	一・五m		
84	九	九	一・五m		
85	九	九	一・五m		
86	九	九	一・五m		
87	九	九	一・五m		
88	九	九	一・五m		
89	九	九	一・五m		
90	九	九	一・五m		
91	九	九	一・五m		
92	九	九	一・五m		
93	九	九	一・五m		
94	九	九	一・五m		
95	九	九	一・五m		
96	九	九	一・五m		
97	九	九	一・五m		
98	九	九	一・五m		
99	九	九	一・五m		
100	九	九	一・五m		
101	九	九	一・五m		
102	九	九	一・五m		
103	九	九	一・五m		
104	九	九	一・五m		
105	九	九	一・五m		
106	九	九	一・五m		
107	九	九	一・五m		
108	九	九	一・五m		
109	九	九	一・五m		
110	九	九	一・五m		
111	九	九	一・五m		
112	九	九	一・五m		
113	九	九	一・五m		
114	九	九	一・五m		
115	九	九	一・五m		
116	九	九	一・五m		
117	九	九	一・五m		
118	九	九	一・五m		
119	九	九	一・五m		
120	九	九	一・五m		
121	九	九	一・五m		
122	九	九	一・五m		
123	九	九	一・五m		
124	九	九	一・五m		
125	九	九	一・五m		
126	九	九	一・五m		
127	九	九	一・五m		
128	九	九	一・五m		
129	九	九	一・五m		
130	九	九	一・五m		
131	九	九	一・五m		
132	九	九	一・五m		
133	九	九	一・五m		
134	九	九	一・五m		
135	九	九	一・五m		
136	九	九	一・五m		
137	九	九	一・五m		
138	九	九	一・五m		
139	九	九	一・五m		
140	九	九	一・五m		
141	九	九	一・五m		
142	九	九	一・五m		
143	九	九	一・五m		
144	九	九	一・五m		
145	九	九	一・五m		
146	九	九	一・五m		
147	九	九	一・五m		
148	九	九	一・五m		
149	九	九	一・五m		
150	九	九	一・五m		
151	九	九	一・五m		
152	九	九	一・五m		
153	九	九	一・五m		
154	九	九	一・五m		
155	九	九	一・五m		
156	九	九	一・五m		
157	九	九	一・五m		
158	九	九	一・五m		
159	九	九	一・五m		
160	九	九	一・五m		
161	九	九	一・五m		
162	九	九	一・五m		
163	九	九	一・五m		
164	九	九	一・五m		
165	九	九	一・五m		
166	九	九	一・五m		
167	九	九	一・五m		
168	九	九	一・五m		
169	九	九	一・五m		
170	九	九	一・五m		
171	九	九	一・五m		
172	九	九	一・五m		
173	九	九	一・五m		
174	九	九	一・五m		
175	九	九	一・五m		
176	九	九	一・五m		
177	九	九	一・五m		
178	九	九	一・五m		
179	九	九	一・五m		
180	九	九	一・五m		
181	九	九	一・五m		
182	九	九	一・五m		
183	九	九	一・五m		
184	九	九	一・五m		
185	九	九	一・五m		
186	九	九	一・五m		
187	九	九	一・五m		
188	九	九	一・五m		
189	九	九	一・五m		
190	九	九	一・五m		
191	九	九	一・五m		
192	九	九	一・五m		
193	九	九	一・五m		
194	九	九	一・五m		
195	九	九	一・五m		
196	九	九	一・五m		
197	九	九	一・五m		
198	九	九	一・五m		
199	九	九	一・五m		
200	九	九	一・五m		
201	九	九	一・五m		
202	九	九	一・五m		
203	九	九	一・五m		
204	九	九	一・五m		
205	九	九	一・五m		
206	九	九	一・五m		
207	九	九	一・五m		
208	九	九	一・五m		
209	九	九	一・五m		
210	九	九	一・五m		
211	九	九	一・五m		
212	九	九	一・五m		
213	九	九	一・五m		
214	九	九	一・五m		
215	九	九	一・五m		
216	九	九	一・五m		
217	九	九	一・五m		
218	九	九	一・五m		
219	九	九	一・五m		
220	九	九	一・五m		
221	九	九	一・五m		
222	九	九	一・五m		
223	九	九	一・五m		
224	九	九	一・五m		
225	九	九	一・五m		
226	九	九	一・五m		
227	九	九	一・五m		
228	九	九	一・五m		
229	九	九	一・五m		
230	九	九	一・五m		
231	九	九	一・五m		
232	九	九	一・五m		
233	九	九	一・五m		
234	九	九	一・五m		
235	九	九	一・五m		
236	九	九	一・五m		
237	九	九	一・五m		
238	九	九	一・五m		
239	九	九	一・五m		
240	九	九	一・五m		
241	九	九	一・五m		
242	九	九	一・五m		
243	九	九	一・五m		
244	九	九	一・五m		
245	九	九	一・五m		
246	九	九	一・五m		
247	九	九	一・五m		
248	九	九	一・五m		
249	九	九	一・五m		
250	九	九	一・五m		
251	九	九	一・五m		
252	九	九	一・五m		
253	九	九	一・五m		
254	九	九	一・五m		
255	九	九	一・五m		
256	九	九	一・五m		
257	九	九	一・五m		
258	九	九	一・五m		
259	九	九	一・五m		
260	九	九	一・五m		
261	九	九	一・五m		
262	九	九	一・五m		
263	九	九	一・五m		
264	九	九	一・五m		
265	九	九	一・五m		
266	九	九	一・五m		
267	九	九	一・五m		
268	九	九	一・五m		
269	九	九	一・五m		
270	九	九	一・五m		
271	九	九	一・五m		
272	九	九	一・五m		
273	九	九	一・五m		
274	九	九	一・五m		
275	九	九	一・五m		
276	九	九	一・五m		
277	九	九	一・五m		
278	九	九	一・五m		
279	九	九	一・五m		
280	九	九	一・五m		
281	九	九	一・五m		
282	九	九	一・五m		
283	九	九	一・五m		
284	九	九	一・五m		
285	九	九	一・五m		
286	九	九	一・五m		
287	九	九	一・五m		
288					

2、日野巖著 瀬戸の官房 昭和一七年

3、牧野富太郎著 新日本植物図鑑 昭和三六年

4、内藤喬、梶原重盛著 鹿児島県自生植物目録 昭和九年

年

七、保存の要件

日本産のフウチヨウソウ科植物は栽培のセイヨウフウチヨウソウを除いて、自生の植物はギヨボク唯一種である。ギヨボクは熱帶植物としても興味あり、宮崎県日南地方はギヨボクの種としても、又、フウチヨウソウ科の科植物としても北半球における分布の北限地帯である。今日確認されたそれぞれの群生地は、植物地理学および地学的にも重要な参考物件となりうるものと思われるので、法律によつて保存し後代に継承することが適当であると考えられる。



鶴戸のギョボク



日南海岸のギョボク自生地（×印）



市木蘿浦のギヨボク自生地



都井岬のギヨボク

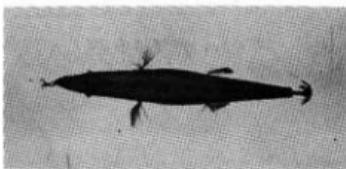


市木蘿浦のギヨボク

八



側面



背面

日南地方で使用する削木

